

# 屋敷の下遺跡（西地区） 第2次発掘調査報告

～伊賀市東条～

2016（平成28）年3月

三重県埋蔵文化財センター

## 例　　言

1. 本書は、三重県伊賀市東条字屋敷ノ下に所在する屋敷の下遺跡（西地区）の第2次発掘調査報告書である。
2. この調査は、平成26年度県営地すべり対策事業（府中6期地区）工事に伴い、記録保存を実施したものである。
3. 発掘調査および報告書作成は、次の体制で平成26・27年度に行なった。

調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県埋蔵文化財センター  
〔平成26年度調査〕 調査研究1課 主幹 伊藤裕偉 主査 谷口文隆 技師 小原雄也  
〔平成27年度整理〕 調査研究1課 主幹 谷口文隆 技師 渡辺和仁
4. 調査にかかる諸費用は、三重県農林水産部が負担した。平成27年度の予算は、農林水産部から県教育委員会経由で、県埋蔵文化財センターの執行委任事務として処理した。
5. 本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
6. 当報告書の作成業務は当センター調査研究1課が行なった。報告文の作成と編集は伊藤、渡辺が行なった。

## 凡　　例

### <地図類>

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、2006三重県共有デジタル地図（平成23年測図）、これらの地図は、全て世界測地系（測地成果2000）に対応している。
2. 2006三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（承認番号；三総合地第93号）。
3. 調査区は世界測地系に基づく国土座標第VI系での位置を示している。挿図の方位は座標北である。なお、磁針方位は西偏7° 00'（平成19年）である。

### <遺構類>

4. 現地土壤の色調と土質は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1967年初版、2003年第23版）を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。
5. 当報告書での遺構は、全体で通番としている。

6. 遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。

S D…溝 S X…墓 S Z…石組・石列

7. 遺構は、調査時に付加せず、この報告段階で新たに付与したものである。

### <遺物類>

8. 当報告での遺物実測図類は、その大部分を実物の1/4で示した。
9. 実測図のうち、上下の外郭線（口縁部・底部など）に切り目を入れているものは、残存が少ない（1/12以下）が、既存事例に基づきおよその大きさを推測して示したものである。
10. 当報告書での用語は、「わん」は「碗」および「椀」、「つき」は「坏」に統一している。
11. 遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号………挿図掲載番号である。

実測番号………実測段階の登録番号である。

様・質………「土器類」「須恵器」といった区分をここに示した。

器種など………遺物の器種を示す。

遺構・層名………遺物の出土した遺構や層名を記した。

法量(cm)………遺物の法量を示す。(口)は口縁部径、(底)は底部径、(体)は体部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。

調整・技法………主な特徴を外面（外；）・内面（内；）で示した。「A→B」はAの後にBが施されたの特徴などを示す。

胎土………小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調………その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度………指示部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることになる。

特記事項………遺物の特徴となるその他の事項を記した。

### <写真図版>

12. 挿図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。

13. 遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

## 本文目次

I 調査の契機・経過と行政的諸手続	(1)
1 調査の契機と協議経過	
2 発掘調査の経過と法的措置	
II 遺跡と周辺の諸環境	(4)
1 位置と地形	
2 歴史的環境	
3 屋敷の下遺跡近隣の状況	
III 調査区の成果～層位と遺構～	(10)
1 調査区の地形と層位	
2 遺構	
IV 調査の成果～出土遺物～	(15)
1 概要	
2 出土遺物の状況	
3 出土遺物の科学分析	
V 調査のまとめと検討	(21)
1 古墳時代の遺構と遺物	
2 古代の伊賀国府と屋敷の下遺跡	
3 中世の遺構と遺物	
4 総括	

## 挿図一覧

第1図 事業地内調査区位置図	第7図 石垣S Z 1、石列S Z 2平面・立面図
第2図 遺跡位置図	第8図 出土遺物実測図(1)古墳・飛鳥時代
第3図 屋敷の下遺跡周辺地形図	第9図 出土遺物実測図(2)古代・中世・近世
第4図 調査区位置図	第10図 府中地区地形図(1)土橋～東条地区
第5図 調査区上層断面図	第11図 府中地区地形図(2)東音寺城跡・外山・鶯棚古墳群付近
第6図 調査区平面図、中世墓S X 3平面・断面図	

## 表一覧

第1表 屋敷の下遺跡出土トリベ状土製品蛍光X線分析結果	第2表 出土遺物観察表(1)
	第3表 出土遺物観察表(2)

## 挿入写真一覧

写真1 事業地内の伐開の様子	写真3 東条1号墳から南方を望む
写真2 石材の確認	写真4 トリベ状土製品付着物

## 写真図版一覧

写真図版 表紙 西調査区(テラス2)全景	写真図版4 遺構(3) 西調査区
写真図版1 調査前風景(テラス2)	写真図版5 遺構(4) 東調査区
写真図版2 遺構(1) 西調査区	写真図版6 遺物(1)
写真図版3 遺構(2) 西調査区	写真図版7 遺物(2)

# I 調査の契機・経過と行政的諸手続

## 1 調査の契機と協議経過

### a 総説

ここで報告する屋敷の下遺跡（西地区）第2次調査は、平成26年度地すべり対策事業（府中6期）に伴い、平成26年9月から同年10月にかけて断続的に調査（記録保存）を実施したものである。工事の事業主体は三重県農林水産部（農業基盤整備課）、実施機関は伊賀農林事務所（以下、伊賀農林）で、発掘調査および資料整理作業を三重県埋蔵文化財センター（以下、当センター）が行った。

### b 事前協議の経過

当センターでは、県営公共事業にかかる文化財の影響を事前に把握するため、毎年度の後半期に次年度の公共事業照会を実施している。照会対象は、掘削を伴う全ての事業である。工事範囲に周知の埋蔵文化財包蔵地が該当していた場合、その取り扱いを協議し、必要に応じて範囲確認調査や工事立会、あるいは発掘調査を実施している。

一方で、周知の埋蔵文化財包蔵地以外で実施される工事についても、遺跡の存在が疑われる地点に関しては事前に現地確認を行い、そのうえで該当開発部局と取り扱いを協議するという方法を探っている。

県営地すべり対策事業（府中6期）は、伊賀市府中地区北部の丘陵部で実施されている事業で、平成21年から断続的に行われている。これまでに、楽音寺跡（平成21年度）、東条1号墳（平成24年度）、屋敷の下遺跡（西地区）（第1次、平成24年度）で工事に伴う立会調査を実施している。

今回報告する屋敷の下遺跡（西地区）第2次調査地点は、平成26年度事業予定地点として、先述の公共事業照会において提示された。その時点では、当該工事予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地外であったが、現地確認を実施したところ、平坦地や古墳状隆起が認められた。当地には、東条1号墳や屋敷の下遺跡が隣接するため、この地点にも遺跡の広がりがある可能性があった。

この結果をもとに、当センターと伊賀農林とで取



写真1 事業地内の伐開の様子（テラス2南面）

り扱いに関する協議を行った。その結果、工事発注し、当地へ掘削が及ぶ段階に掘削時立会を実施することとなった。

### c 遺跡の発見と対応

平成26年9月に当地の工事が発注された。受注業者は名阪設備工業株式会社である。伊賀農林との協議の結果、工事の進捗に合わせ、10月6日に掘削時立会を実施することとなった。

工事の本体は小河川の堰堤敷設だが、そこへの進入路が無いため、仮設道の設置が付帯工事としてあった。本体工事にかかる文化財の課題は無かったが、この仮設道設置によって遺跡の発見される可能性が考えられた。

仮設道の開削がよいよ丘陵に及び、掘削時立会を行った。すると、予想通り古墳時代の土器が出土し、ここに遺跡のあることが確認された。この状態をもとに伊賀農林と再度協議を行い、まずは遺跡の発見届を伊賀農林から提出することとなった。

これと併行し、遺跡の把握と認識について伊賀市教育委員会と協議を行った。当該地点は、これまで屋敷の下遺跡（C地区）および屋敷の下遺跡（D地区）として把握されていた中間地点にあたる。近隣の地形と環境、および遺物の散布状況を勘案すると、今回の工事地点も含め一連の遺跡と考えるのが妥当という認識に至った。そこで、屋敷の下遺跡（C地



写真2 石材の確認（テラス3古墳状隆起）

区）と屋敷の下遺跡（D地区）をあわせ、今回の調査地点も含めて「屋敷の下遺跡（西地区）」として新たな遺跡範囲を示して周知することとなった（第3図）。

なお、工事は緊急性があることから、引き続き実施し、遺跡の記録保存調査は併行して行うこととなった。

## 2 発掘調査の経過と法的措置

### a 調査の経過

前述のように、発掘調査は工事の中に組み込むかたちで実施した。そのため、工事受注者である名阪設備工業株式会社の土工管理と資材提供を受けた。実際の調査には、工事の下請けを受注した共栄建設株式会社が掘削の補助をした。

仮設道は、丘陵内のテラス1～3を通り、テラス4・5へと至るルートが当初設計されていた（テラスの位置については第III章参照）。当初、それに即し、テラス1・2に掘削が及び、テラス2では石垣・石列と古墳時代土器の出土が見られた。テラス3は、工事掘削前に試掘の掘削を行ったところ、古墳状隆起であることが判明した。

この結果を基に、伊賀農林と再度協議を実施した。協議は、遺跡が発見された以上何らかの対処をせざるを得ないが、テラス3で確認された古墳状隆起の調査には時間が必要となることから、仮設道の敷設位置を再検討した。変更案は、当初案のテラス1～5にかけての位置から東側へ移動させ、テラス4・

5を通る位置である（第1図）。この結果、テラス2で確認された石垣・石列は現状のまま埋め戻して保存、テラス3の古墳状隆起も現状のまま保存されることとなった。この一方、テラス4に一部改変が加わることとなり、工事と併行して記録保存を行うこととなった。

以上のように、いくつかの紆余曲折を経ながらも、どうにか最低限の文化財保護を行うことができたのがこの調査であった。文化財保護に理解を示された地元の東条地区と、伊賀農林をはじめとした県農林水産部には深甚の謝意を表したい。

実際の掘削は、平成26年10月9日から開始し、断続的に実施しつつ同年10月23日に終了した。最終調査面積は68m<sup>2</sup>である。

以下、調査の経過を記す。

9月17日 伊賀農林と現地打ち合わせ。事業地内の平坦地に入為的な石列を目視確認。

10月6日 降雨。現況確認を実施。

10月7日 事業地内の伐開。平坦地の地形が明確となる。

10月9日 テラス1・2から掘削を開始。テラス2の下部に石垣1を確認。テラス2の平坦部に石列2と古墳時代墳のビット・溝などを確認。

10月10日 テラス2の全体写真撮影。その後遺構実測図の作成。

10月15日 テラス3の掘削。尾根稜線上の古墳状隆起部分から入為的な石列が確認される。

10月16日 伊賀農林と再協議。仮設道の位置を変更し、テラス3を廻避せず、テラス4を通すこととなる。

10月20日 テラス4の調査。中世墓のほか、古墳時代の土器がまとまって出土。テラス4全体写真及び図面作成。

10月22日 テラス4の土層図作成。

10月23日 テラス5の調査。遺構・遺物が存在しないことを確認。調査終了、撤収。

### b 調査成果の普及・公開

今回の調査は、工事に伴い発見された遺跡に対するものであった。そのため、時間的な余裕は無く、現地説明会の開催は見送ることとした。

その他の普及公開事業として、県公共事業にかか

る発掘調査の成果報告会である「おもろいもん出ましたんやわ@三重 2014」（平成 27 年 3 月 14 日開催）で、当遺跡出土資料の展示と解説を行った。

c 文化財保護法等にかかる諸通知

上述のように、星敷の下遺跡（西地区）は周知の埋蔵文化財包藏地である星敷の下遺跡（C 地区・D 地区）の範囲拡大により、2 地区を合わせて「西地区」として把握し直したものである。遺跡にかかる文化財保護法（以下、「法」）の諸通知は、以下により行われている。

・遺跡発見通知

平成26年10月9日付け、  
賀農第699号

・遺跡範囲拡大通知

平成26年11月26日付け、  
教埋第302号

・遺失物法にかかる文化財の発見・認定通知  
(伊賀警察署長あて県教育長通知)

平成26年12月4日付、  
教委第12-4424号

(伊藤)



第1図 事業地内調査区位置図

## II 遺跡と周辺の諸環境

屋敷の下遺跡（西地区）周辺の諸環境は、東条1号墳の発掘調査報告書内で述べられている。両者の発掘調査契機となる事業は同一なので、ここではそこでの記載を基に、情報を適宜加除していくこととする。

### 1 位置と地形

屋敷の下遺跡は、三重県伊賀市東条字屋敷ノ下に位置する。伊賀市と名張市を含めたこの地域は「伊賀地域」と呼ばれている。「伊賀盆地」の名も知られているように、山に取り囲まれた盆地地形をなしている。

伊賀盆地は木津川の上流部にあたる。木津川は京都府南部で淀川とつながり、大阪湾へと注ぐ。三重県域の東部にあたる伊勢地域を流れる河川は伊勢湾へと注ぐのに対し、県域の西部にあたる伊賀地域の河川は淀川を経て大阪湾へと至る。このことからも、三重県域西部の伊賀地域は、近畿地方とのつながりが深い地域として認識できるであろう。

伊賀地域を流れる木津川は、大きくは木津川本流と柘植川・服部川の2水系に区分できる。木津川・服部川流域は、伊賀盆地のなかでも北部にあたる。そのため、「北伊賀」や「伊賀北部地域」とも呼ばれる（以下、「北伊賀」と呼称する）。北伊賀は、有史以前には古琵琶湖が広がっていた地域で、服部川の流域では300万年ほど前の足跡化石（ゾウなど）が確認されている。

屋敷の下遺跡は、柘植川北岸部に形成された段丘および丘陵部にある。南西から北東方向にかけて丘陵・段丘・河川がそれぞれ直線的に延び、眺望の効く景色が広がっている。数々の歴史を刻んできたこの段丘上は、現在もJR関西線や国道25号が通る重要な平地である。

### 2 歴史的環境

北伊賀を中心とした当地の歴史的諸環境について、既存の調査や資料をもとに概観する。屋敷の下遺跡を中心に見るために、弥生時代以降の状況に限定して



写真3 東条1号墳から南方を望む

見ていくこととする。

#### a 弥生時代の伊賀北部地域

木津川を通じて近畿地方と通じる伊賀地域は、弥生時代以前の段階でも近畿地方とのつながりが強い。総じて伊賀地域の弥生土器は、東海地域との共通性も有するが、大和・山城・近江といった近畿地方との関係の方がはるかに強い。代表的な弥生時代遺跡としては、小芝遺跡（前・後期）、山ノ川遺跡（後期）、印代東方遺跡群（中・後期）、森脇遺跡（中期）などがある。伊賀の弥生時代としては、概点となるような大規模遺跡が未だ明確ではなく、各期ごとに遺跡が散在する状況と考えられている。

これらの遺跡から出土する土器類の傾向としては、大和地域および近江地域との関係が大きい。大和・近江とともに、個性的な地域色を有する土器類を生産している。一方、伊賀地域の土器類は、大和・近江とは明らかに異なる地域色を発現しているわけではない。当時の伊賀地域が置かれた状況をよく表しているといえる。

#### b 古墳時代の伊賀北部地域

北伊賀では、古墳時代に至ると伊賀地域の中でも代表的な古墳が造られる。それは、とくに中後期段階で顕著となる傾向がある。

古墳時代前期では、その初期に東山古墳が築造されている。柘植川北岸の丘陵上に築造されたこの古



第2図 遺跡位置図(国土地理院『月ヶ瀬』『上野』『伊勢路』)

墳は、墳頂も明瞭ではない直径15m程度の円形墳だが、舶来の四神鏡や銅鏡が副葬されていた。

次に、三角縁三神二獸鏡の出上で知られる山神寄建神社古墳がある。直径約30m程度の円墳と考えられている。この古墳は柘植川・服部川・木津川の3河川が合流する盆地低地部を望む位置にあり、当時の中核的な古墳であったと考えられる。

中期前葉には全長約180mの御墓山古墳が造成される。御墓山古墳は伊賀最大の前方後円墳である。その他にも、柘植川北岸部の丘陵上に、外山1号墳・鷺棚1号墳などの前方後円墳が造成される。中期前方後円墳がこれほど集中するのは、伊賀地域内でもとくにこの地の顯著な傾向といえる。

北伊賀では、古墳時代中期末から後期前半にかけて、鏡を副葬した小規模古墳が数多く確認できる。東条1号墳もその一例で、当地域の特徴といえる。

古墳時代後期を中心とした群集墳は、柘植川北岸部の丘陵上に数多く展開している。発掘調査された浅子谷古墳群は、横穴式石室墳や小石室墳を埋葬施設とした9基の古墳で構成されていた。

古墳時代後期後葉の代表的な古墳に、勘定塚古墳がある。柘植川北岸部で、東条古墳群の東方約1kmにあたる。墳丘・石室とともに損壊著しいが、玄室幅3.6mの巨大な横穴式石室を有している。

このように、北伊賀では古墳時代を通じて多彩な古墳の造成が見られる。伊賀のなかでも極めて重要な地であることを示している。

### b 古代の伊賀北部地域

古代の北伊賀は、伊賀国阿閉郡にあたる。『和名類聚抄』には柘植・川合・印代・服部・三田・新居の六郷が記載されている。東条古墳群の付近は、伊賀国府所在地と同じ印代郷に比定されている。

この時期の当地を考える上で重要なのは、官道と伊賀国府、そして駅家である。五畿七道の制が実施されて以降、伊賀国は東海道に含まれる。なかでも伊賀国は、東海道の最西端（つまり最も畿内に接した位置）にあたり、その玄関口である。

「道」そのものの観点からすれば、平安時代前期の仁和2（886）年以降の東海道は、平安京（京都）から近江・鈴鹿峠を経て伊勢北部へと至るルートとなつたが、それ以前の東海道（以下、「初期東海道」）

とする）は伊賀北部を経由していた。現在の伊賀市外山で確認された伊賀国庁跡は、初期東海道沿いで、それに北接して造成されている。

初期東海道沿いには、それと関連する遺跡が点在する。『続日本紀』和銅四（711）年一月丁未（2日）条には、伊賀国新家駅が登場する。この故地は、かつて新居郷と呼ばれていた。現在の伊賀市東高倉周辺と考えられている。残念ながら遺跡の特定には至っていないが、この地にある官舎遺跡や古屋敷遺跡はその関連遺跡として注目できる。

伊賀国新家駅想定地から東進すると、三田庵寺がある。この寺跡は、山田寺式軒瓦の出土で著名である。三田庵寺からさらに東進すると、井戸地遺跡・北門遺跡・外山遺跡群など奈良・平安時代の集落跡があり、さらにその東に伊賀国庁跡がある。外山遺跡群は、その位置関係から伊賀国府と密接に関連した集落跡と考えられている。

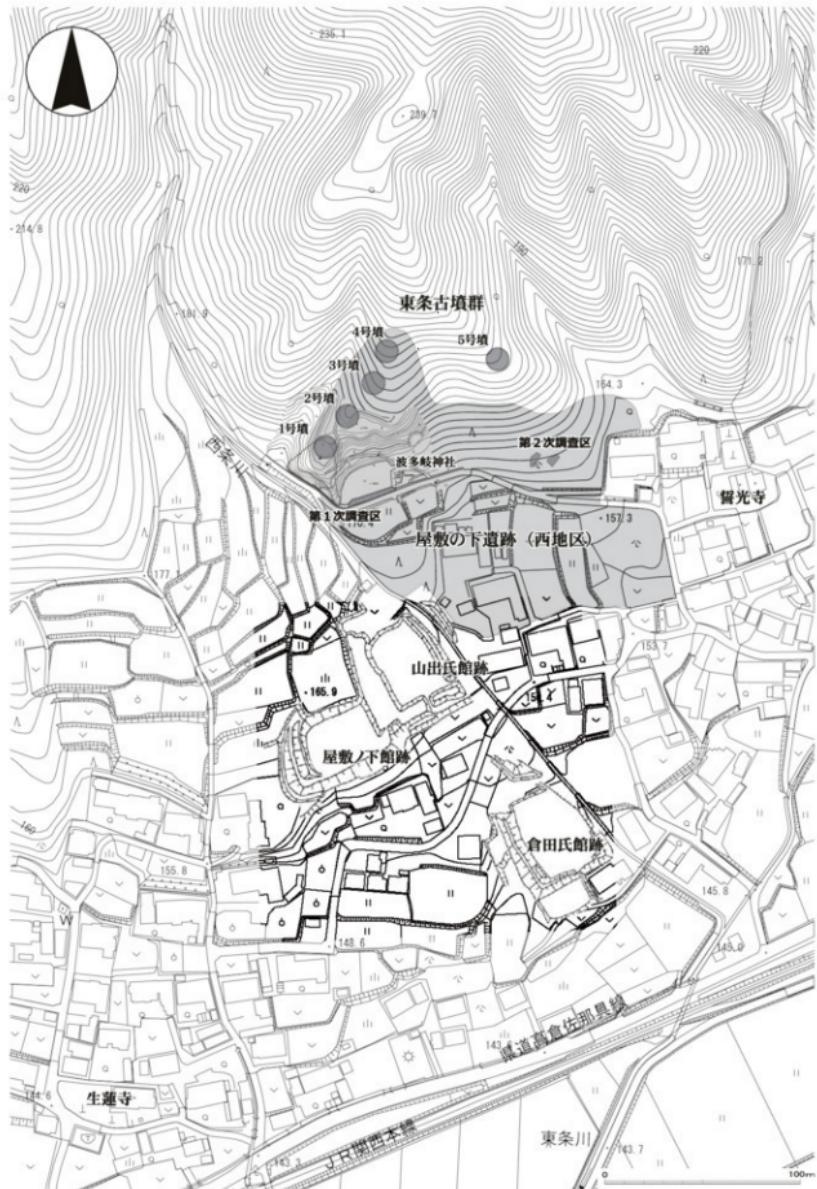
伊賀国庁跡の南方約1.5kmには、伊賀国一宮である敢國神社があり、さらにその南方3kmには伊賀国分寺・國分尼寺（長楽山庵寺）がある。この3者は概ね一直線上にあり、国庁へ一宮へ国分寺という、国府中枢の主軸の有り様が見て取れる。

なお、北伊賀は、古代豪族・阿閉（敢）氏の拠点とされている。伊賀国一宮が敢國神社であることや、当地に伊賀国庁が設置されていることなど、北伊賀は伊賀国のなかでもとくに古代中央政府との関係が深いと考えられる。この状況は、基本的には古墳時代まで遡り得るものと考えられる。

### c 中世の伊賀北部地域

平安時代後期から鎌倉時代にかけて、北伊賀の各地で荘園が増加する。伊賀といえば東大寺領荘園が著名だが、北伊賀では興福寺・春日社領を含む浜間家領や六条院領などの王家領が目立つ。かつて新居駅家があった地域は、春日社領新居莊であった。平安時代末期には服部川中流域の六条院領平田莊が平氏の拠点となり、平氏宿老の平家貞の子息である平田家維らが勢力を振るった。

この一方、宗教的な要地もこの時期に増える。浄土信仰や熊野信仰との関わりのなか、伊賀市高倉地区には補陀洛寺や高倉神社が建立されたと考えられる。また、大光寺・妙覺寺といった『西大寺諸国末



第3図 屋敷の下遺跡周辺地形図

寺帳』に記載される律宗系寺院のほか、仏土寺などの大規模寺院もこの時期に造立され、新たな展開を迎えているものと考えられる。

南北朝期の抗争を経て室町戦国期には、当地にも足利幕府の影響が及ぶ。14世紀中葉に全国に造立された安国寺は、星敷の下遺跡の西方約1.5kmの地に建立された。

伊賀国には守護として仁木氏が入部した。伊賀国は他地域に比べて独立性の高い小規模領主層が多くたためか、室町期守護による地域支配はあまり進展しなかったようである。守護の館は、前出の古屋敷遺跡に近い上山氏館跡とされる。守護は独立した館を持たず、有力土豪の星敷に間借りしていたのであろうか。

それでも、仁木氏は地域秩序のなかに一定の影響を持つ存在だったようで、天正2(1574)年の春日神社(高倉神社)棟札に仁木長政の名が見える。室町期を通じ、伊賀国守護として入部した仁木氏は、曲がりなりにも伊賀に根ざしていたと言えそうである。

また北伊賀では、「土符」と呼ばれる独特の遺物が集中して出土している。土符は、年月日・花押のほかに「米」などの文字が刻まれた状態で焼かれた陶器質の焼き物である。紀年銘から、15世紀代を中心とした時期に集中して作られている。土符は、守護館のあったとされる上山氏館跡付近に集中出土することから、守護の閥とする、伊賀北部地域を中心とした微税に関わる遺物として注目されている。

このように、中世後期(室町戦国期)の北伊賀は、前代から継続して伊賀国の中枢として機能していたと考えられる。

#### d 繼豊期から近世の北伊賀

伊賀の中世と近世を分ける重要な事件として、伊賀惣国一揆と天正伊賀の乱がある。伊賀の地域的紐帶は、陽夫多神社(馬場)、春日神社(川東)などに所蔵されている神事当番帳や、各地の神社に残る棟札銘により、宮座を核に有力土豪層によって形成されていたことが知られる。神事当番帳は天正伊賀の乱(1579~81年)以後のものが多いが、基本的に中世後期から継続する地域的紐帶を示すものと認識されている。川東地区にある春日神社には、室町期に遡る拝殿(県指定文化財)が残されており、周

辺に点在する城館群とともに伊賀を代表する文化的景観を残している。

土橋に所在する波多岐神社には、慶長9(1604)年銘の三之宮大明神棟札が所蔵されている。この本願は東条に住む周珍という人物で、星敷の下遺跡と何らかの関わりを持つ可能性がある。また年預衆には高屋・林という有姓の土豪と見られる人物とともに、土橋・西条・貴船・山神・印代・東条・石井・坂下の肩書を持つ百姓衆と見られる名が見える。波多岐神社は伊賀国三宮であり、『三国地誌』にある府中郷(土橋・西条・東条・山神・印代・坂下)の惣社として紐帶の核となっていたと考えられる。

天正7年と9年の2度にわたる織田軍の侵攻により、北伊賀では、田矢伊予守城(川合)、柏野城(柏野)、壬生野城・春日山城(川東)で大規模な攻城戦があったとされている。この合戦で伊賀は壊滅的な打撃を受けたとされるが、実態はどうであったのだろうか。大規模な攻城戦があったとされる春日山城跡の南麓には前出の春日神社拝殿があり、戦火に遭ったとは考えにくい。ただ、伊賀国では中世の優秀な仏像が数多く残されている一方、中世の建造物が明らかに少ないのは事実である。

織豊後期から江戸期にかけては、北伊賀のなかでも柘植川南岸地域の動向が際立ってくる。豊臣政権期に伊賀へ入部した筒井氏は、伊賀上野城の前身を築造する。閑ヶ原の戦いを経て伊賀国を拝領した藤堂氏は、筒井氏時代の上野城を大改修し、この地を伊賀支配の中枢とした。

なお、江戸期にも、官座を核とした先述の地域的紐帶が、伊賀の各地で形成されていた。

#### e 伊賀北部地域の意義

伊賀北部地域の動向を概観した。この結果、室町戦国期以前の当地は柘植川北岸部にその中心があり、織豊期以降は柘植川南岸にその中枢が移動することがおぼろげながら見えてくる。いずれにしても伊賀北部地域は、近世以前においても伊賀国を中心的な地域であったことがわかる。

### 3 屋敷の下遺跡近隣の状況

星敷の下遺跡近隣の状況について、第3図を基に見ておく。

屋敷の下遺跡を含めた東条地区丘陵部には、いくつかの削平段がある。東条古墳群周辺では、2号墳東側に、墳丘の一部を破壊して東西約18m、南北約8mの「L」字形に成形された区画がある。また、3号墳の位置には、室町期と考えられる石仏と五輪塔残欠が、4号墳の脇には「秋葉三尺坊」と刻まれた石碑がある。石碑そのものは昭和前半期頃のものと考えられるが、この近隣に秋葉社ないしは秋葉三尺坊に関係する觀音信仰の施設が存在していたことが考えられる。

丘陵裾部には小祠がある。地図では波多岐神社と記載されているが、合祀前に薦枕（こもまくら）神社があつた地と考えられる。

今回の調査地近隣にも、いくつかの削平段が形成されている（第4図、テラス1～5）。テラス2は比較的整形が丁寧で、平坦面の周囲は周溝状に掘り廻されている。地元の聞き取りでは、この近隣に神社があつたといい、テラス2がそれに相当する可能性が高い。

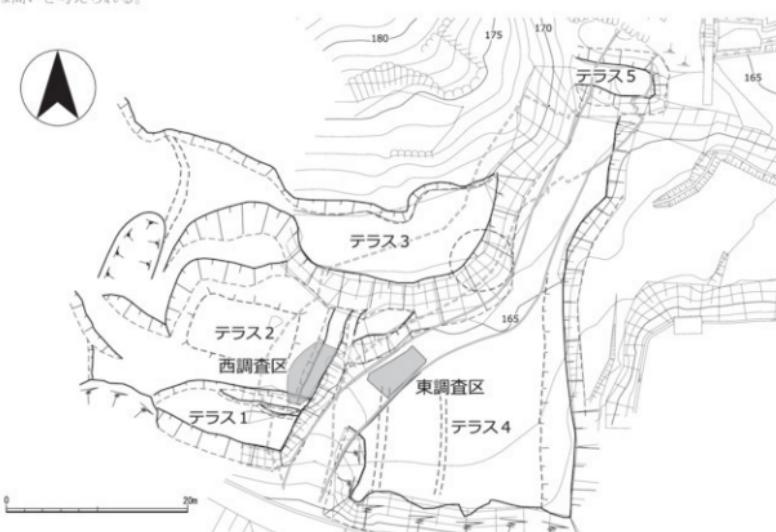
以上のように、屋敷の下遺跡周辺の丘陵に点在する削平段は、中世以降の寺社施設を含んでいる可能性は高いと考えられる。

なお、以前に実施した地元での聞き取りでは、周辺には「トノモト」「カマノシタ」「ミヤノシタ」といった地名があり、「セイコウ寺」という寺院があつたという。現在の東条にある誓光寺の前身寺院であろうか。近世前期に菊岡如幻によって作成された『伊水溫故』（貞享4・1687年刊）では「盛弘寺」とある。

屋敷の下遺跡の西側には、山出氏館跡・屋敷の下館跡・倉田氏館跡などの小規模方形城館が連なる。宗教施設とあわせ、様々な施設が密集していた地であることが分かる。

#### 【参考文献】

- ・伊賀市編『上野市史』考古編（2005年）
- ・伊賀市編『伊賀市史』第1巻通史編古代中世（2011年）
- ・『三重県の地名』（日本歴史地名大系24、平凡社、1983年）
- ・木下良編『古代を考える 古代道路』（吉川弘文館、1996年）
- ・『続日本紀』（新訂増補国史大系、吉川弘文館）
- ・三重県埋蔵文化財センター『浅子谷古墳群発掘調査報告』（2012年）
- ・三重県埋蔵文化財センター『古屋敷遺跡発掘調査報告』（2013年）
- ・三重県埋蔵文化財センター『東条1号墳・屋敷の下遺跡』（2015年）



第4図 調査区位置図

### III 調査の成果～層位と遺構～

#### 1 調査区の地形と層位

##### a 調査地の地形

調査地は伊賀市東条の集落北西部で、服部川を南に望む丘陵内にある。現況は山林で、標高約150～160mである。調査地のさらに北側には小規模な谷が入り込んでいる。つまり調査地は、南東方向に派生する小尾根上とその斜面ということになる。

第I・II章で見たように、事業地には削平段が5ヶ所ほど認められる。それぞれの削平段がどの時期に造成されたのかは、調査状況を見ていく中で明らかになるであろう。

##### b 調査区の基本層序

調査区は、西調査区・東調査区の2箇所に大きく分かれる。当地の層序を、基本土層図で観察する(第5図)。調査区西壁土層は西調査区で、テラス1・2に相当する。調査区東壁土層は東調査区で、テラス4の土層図である。

西調査区(テラス1・2) 基本層序をまとめると、第I層；表土・腐葉土(同図第1層)、第II層；砂質褐色シルト(同図第2層)、第III層；縮まりのある褐色土(同図第3～11層)、第IV層；混礫褐色土(同図第12～15層)となる。当地は砂岩および花崗岩を基盤とする丘陵部なので、これらの構成層はいずれもこれに由来すると考えられる。

第I層は、現況地形の表土となる層で、直下の第II層を忠実にトレースしている。第II層は縮まりのないシルトで、現地形を構成している。とくに北側で厚く、40cmほどある。出土遺物から、室町期から江戸期にかけて形成されたものと考えられる。

第III層は複雑な重複を示すが、やはり整地層と考えられる。人力掘削が難渋するほど非常に縮まりが強い。この縮まりが何に起因するのかよく分からぬ。土層中のカルシウム分が凝固したらこうなるのであろうか。これまでに経験が無いほどの硬さであった。層中には古墳時代の遺物を含んでいる。この層に切り込まれた遺構からは、奈良時代頃の土器類が出土している。以上のことから、この層は奈良時代

頃には形成されていた可能性が考えられる。

第IV層は当地の地山に相当するが、岩盤そのものではなく、岩盤崩落土と考えられる。層の質としては、第III層とはほとんど変わらない。

東調査区(テラス4) 基本層序は第I層；表土・擾乱土(第5図第1層)、第II層；砂質褐色シルト(同図第2～4層)、第III層；黃褐色系土(同図第5～10層)、第IV層；褐色土(花崗岩媒乱土、同図第11・12層)である。テラス4の第I～IV層は、テラス1・2の第I～IV層と基本的に符合する。

第II層は、テラス1・2と同様に整地層と見られる。ここでは第4層から中世後期の遺物が出土しているため、第II層は中世後期以降に形成されたことが判明する。

第III層には、古墳時代後期を中心とした遺物を包含している。この層の下面には、いくつかの遺構が認められる可能性があるものの、工事に立会ながらの調査であったため、それを明確に把握することはできなかった。そのため、出土遺物は包含層扱いとしているが、遺構に伴うものである可能性のあるものが含まれている。なお、テラス4の第III層は、テラス1・2ほどの硬さは無かった。

第IV層は地山に相当し、花崗岩の媒乱土が確認できる。

#### 2 遺構

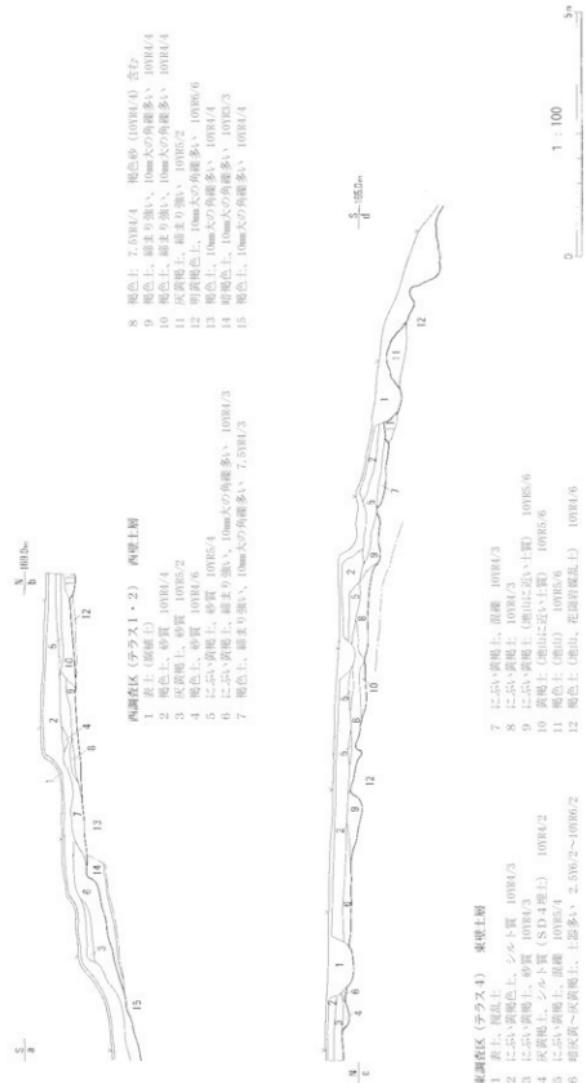
確認した遺構は、古墳時代、奈良時代、室町時代のものがある。以下、テラスごとに遺構を記述する。

##### a 西調査区(テラス1・2)

ピット群、溝、および石垣・石列がある。

ピット群等(第6図) 第III層上面で検出しており、調査区内で14基を確認した。遺構埋土は、概ね褐色系粗砂質シルトである。古墳時代後期から奈良時代までの遺物を含む。ピット群は、掘立柱建物を構成すると考えられるが、建物としてまとめることはできなかった。

溝SD5(第6図) 第III層上面で検出した。溝は幅15cm程度で、深さは5cm程度の浅いものである。



第5図 調査区土層図 (1:100)

\*西調査区東壁土層図は、道構平面図よりもさらに南東へ続いている。

堅穴住居の壁周溝に相当する可能性があるが、確定できる要素は無い。なお、S D 5 の北側には焼土面があり、これも堅穴住居の一部である可能性がある。

**石垣 S Z 1**（第6・7図） テラス1と2の境目で検出した。テラス2の南端面、標高の低い側に1.4mほどが残る。石垣の西端は水平方向に対しL字形に屈曲して北側へ70cmほどつながっている。

まず、南面の石垣を見る。南面の石垣は、4段ないしは5段が残っていた。4・5段目は石材間の目地が大きく、草木根により荒れていると考えられる。傾斜角度は垂直に近い。西端は角部を形成していないため、さらに西側へ続いているものと考えられる。基底石は、据形を若干掘り窪め、横幅30cm程度の石材を用いている。石材の疊み合わせを見ると、基底石は東から西へと積んでいるが、続く2段目は西から東へと積んでいる。用材は、基底石よりも上段の石材が大きい。とくに3段目の角石（自然石）は最も大きく、横幅は50cmを越えている。

次に、西面の石垣を見る。南面石垣から角部を経て北側に向かう西面石垣は、4段ほどが残っている。傾斜角度は垂直に近い。基底石は1石だが、上段部分ほど奥に用材が増える。地山面をそのまま利用しているためと考えられる。南面石垣と同様に基底石よりも上段の石材が大形である。

角部は、やや変則的だが算木積みと見てよいであろう。また、石垣の裏に裏込め石は無かった。

石垣 S Z 1 の構築時期は、直接示す出土物が無かったので、歴密には不明である。しかし、第III・IV層を切り込んでいること、テラス2から15世紀後半代の信楽焼鉢が出土していること、石垣の構築方法などの状況証拠から、15世紀後半から16世紀後葉までの間のものと考えられる。

**石列 S Z 2**（第6・7図） テラス2の東端で検出した遺構である。最大横幅80cmの大形石材が4個並べられている。面は西側に揃えている。大形の石材間にには、目地を埋めるために15cm大前後の小形石材が用いられている。

石列下部の層序（第6・7図）からは、この石列は第II層の形成中か形成後に造作されたことがわかる。石列前面には、石列と併行する幅30cmほどの溝を確認しており（不手際により作図前に除去したた

め図化していない）、その埋土中から16世紀前半頃の土器類が出土しているので、石列はその頃のもとのと考えられる。

なお、石列 S Z 2 の上部には、調査前に土壌状の高まりを確認している（第7図）。土壌状高まりと石列 S Z 2 の方向は描っていないため、現地形が造作される前の構造物と考えることができる。

#### b 東調査区（テラス4）

中世墓と溝がある。また、第III層中からは古墳時代の土器類が多く出土している。

**中世墓 S X 3**（第6図） 調査区中央北部で検出した。一辺約50cmの平面方形の土坑で、検出面からの深さは5cm程度で、遺存状態が悪い。遺構内から銭貨（皇宋通寶：北宋）が出土している。平面形態から中世墓と考えられる。

検出範囲内に被熱部は無いが、削平が激しいため、火葬墓（火葬骨埋納坑を含む）か土葬墓かは分からぬ。

S X 3 の南西にも同様な土坑がある。これらが一群の中世墓である可能性が考えられる。

**溝 S D 4**（第6図） 調査区北部で検出した東西南向の溝である。幅は約60cmで、断面は緩いV字形を呈する。検出面からの深さは約10cmである。埋土内から15世紀末頃の土器が出土しており、遺構の時期を示すと考えられる。

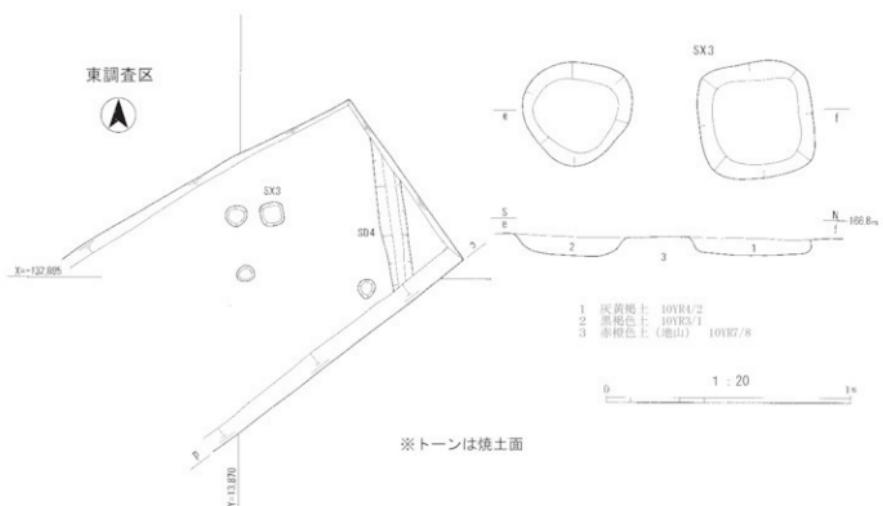
#### c その他の状況

**テラス3** テラス3は、当初は発掘調査対象地であったため表土掘削を行ったが、工事中の協議により開削が回避された。そのため、精査は行っていない。

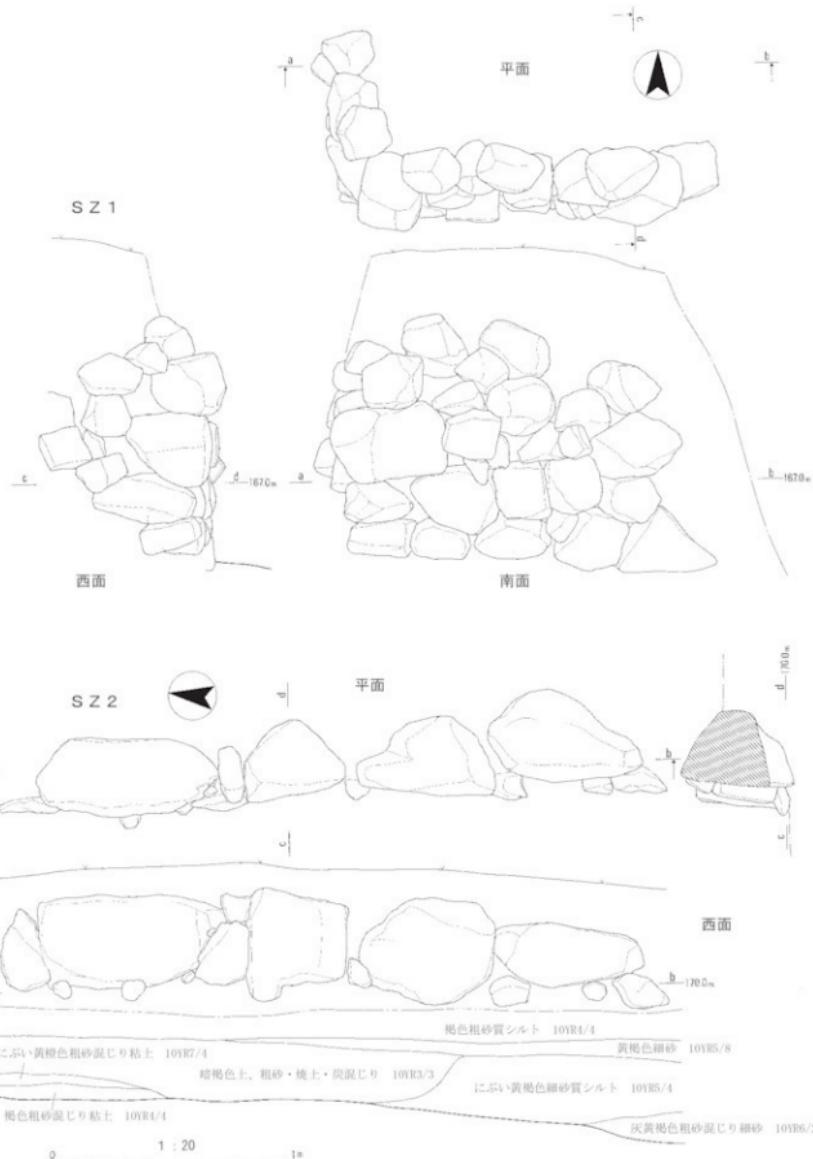
表土掘削段階で東南隅に石列を確認した。古墳の可能性もあるが、一連となる石材が確認できなかつたため、他の遺構である可能性が高い。テラス2の南面で確認したような石垣があるのかも知れない。

表土からは、江戸時代後期頃と考えられる土器類がまとまって出土している。

**テラス5** テラス5は、今回の対象地のなかで最も北端に位置する。人工的な隆起地形で、古墳の可能性を考えたが、遺構・遺物ともに全く確認できなかつた。構成土の状況から、近世以降に形成された堰堤の一部かと考えられる。



第6図 調査区平面図(1:100)、中世墓SX3平面・断面図(1:20)



第7図 石垣SZ 1、石列SZ 2 平面・立面図 (1:20)

## IV 調査の成果～出土遺物～

### 1 概要

屋敷の下遺跡（西地区）第2次調査で出土した遺物は、整理箱に5箱（約8.7kg）である。内訳は、古墳時代から江戸時代（近世）にかけての土器類（土師器・須恵器・陶器・磁器）のほか、近世の瓦などがある。

実測図を第8・9図に示した。図示した遺物の出土地点や詳細については、出土遺物観察表（第2・3表）を参照されたい。

### 2 出土遺物の状況

#### a 古墳時代～飛鳥時代の遺物

西調査区 pit8出土土器（1・2） 1は須恵器环身である。口縁部の立ち上がりは短く、端部は丸く収められており、銳さがない。2は須恵器長頸壺の頸部である。ロクロナデが施され、三条の沈線がめぐる。1・2は田辺昭三編年（以下、田辺編年）<sup>9</sup>のTK217型式に相当し、7世紀前半のものと考えられる。

石組S Z 2付近出土土器（3・4） 3・4は土師器甕の口縁部である。3の口縁端部は外傾する端面を持ち、4は口縁端部が丸く収められている。

西調査区西部出土土器（5） 5は土師器高环の脚部である。脚柱部外面は、ゆるい面取りがなされており、根部にかけてはヨコナデが施される。脚柱部内面には成形時のシボリ目が残り、その上からヘラケズリが施されている。

西調査区西部暗赤褐色土出土土器（6） 6は土師器甕の底部である。内外面ともにナデが施されており、内面には成形時のユビオサエの痕跡が残る。

テラス3下表土出土土器（7） 7は須恵器高环の脚部である。内外面ともにロクロナデが施されている。

東調査区表土出土土器（8） 8は須恵器环身である。口縁端部は内傾する端面を持ち、端面には沈線がめぐる。口縁部および受部端部は丸く収められており、銳さはない。田辺編年のMT15型式に相当し、

6世紀前半のものと考えられる。

東調査区第2層出土土器（9・10） 9は須恵器环身である。口縁端部は内傾し、口縁部および受部端部に銳さはない。田辺編年のMT15型式に相当し、6世紀前半のものと考えられる。

10は土師器甕である。口縁端部は外反し、内外面ともにヨコナデおよびナデが施される。

東調査区黄褐色土出土土器（11） 11は土師器の二重口縁壺である。口縁端部は外傾し、口縁部の屈曲は、外面は緩いが内面は棱をなす。他の土師器類と異なり、白灰色を呈している。

東調査区第6層灰色土出土土器（12～24） 12～15は須恵器环蓋である。12～14は天井部である。稜の突出は小さく、端部に銳さはない。13の外面には、ヘラ記号の可能性がある線刻が3条認められる。14の内面には、同心円当て具痕がみられる。15は口縁部である。端部は内傾し、内面に浅い沈線を持ち、銳さはない。接合はできないが、胎土の色調などの特徴から14と同一個体である可能性が高い。12～15は、田辺編年のMT15型式に相当し、6世紀前半のものと考えられる。

16は須恵器高环の脚部である。根部に向かって広がる形状のものと考えられる。田辺編年のMT15型式に相当し、6世紀前半のものと考えられる。

17は土師器甕である。口縁部は外反し、端部は丸く収められている。口縁部内面がハケメのチョコナデ、体部内外面はナデ、外面にはユビオサエの痕跡がみられる。口縁部及び体部上位には粘土紐の継ぎ目痕がみられる。

18～20は土師器甕である。18はミニチュアの甕である。内面にはユビオサエの痕跡がみられ、内外面はナデが施される。19は体部から底部である。体部外面はハケメ後にナデ、内面は板状工具を使ったナデが施される。体部の形状や大きさから、小型の直口甕である可能性が高い。20は広口甕である。口縁部は外反して開き、端部は外傾する。体部内面には板状工具を使ったナデが施されており、外面の下位には粘土紐の継ぎ目痕がみられる。

21・22は土師器甕である。21は小型の丸底甕である。口縁部は外反し、端部は丸く收められている。体部上位が縱方向のハケメ、体部下位から底部は横方向のハケメ、体部内面はハケメおよび板状工具を使つたナゲが施されており、体部上位と底部および体部下位では調整に違いがみられる。器厚が厚く、全体が歪んでおり、調整も粗雑である。22は長胴甕である。口縁部は外反し、端部は外傾する。体部外面は縱方向のハケメ、内面は横方向のハケメが施される。

23・24は土師器瓶である。23は口縁部である。口縁部に向かって外反しながら開き、端部は内傾して丸く收められている。24は蒸気孔のある底部で、孔径（底部径）9.2cmである。孔端部は内傾する端面をもつ。孔径の大きさから、孔径の大きさから、孔の数は1つと考えられる。  
(渡辺)

#### b 奈良時代の出土遺物

奈良時代の出土遺物は4点ある（25～28）。全て西調査区からの出土である。

25は土師器壺A。口縁端部内面が断面回線状に窪む。口縁部は直線的に開き、外面ともにヘラミガキは見られない。都城編年の平城IV<sup>③</sup>に併行する時期と考えられる。26～28は須恵器壺B。高台は下部が断面回線状に窪むものである。都城編年の平城II～IVの時期間に収まるものであろう。

#### c 中近世の出土遺物

中近世の出土遺物は、少ないながらもテラス1～4の全調査区で確認されている。

西調査区（テラス1）出土遺物（29～33） 29は土師器皿。口縁端部内面は、弱い面を形成している。16世紀前半頃のものと思われる。

30は、直径6cmほどの筒状を呈する体部に、横幅約2cm・縦幅約4cm・厚さ約1cmの耳状把手？を付加する。第9図の図面は反転して対になる2個の耳として表現しているが、実際は片耳の可能性もある。小型の容器状を呈している。内面の付着物を自然科学分析したところ、鉛・亜鉛・銅・鉄・チタンの成分が突出して検出された。そのため、鋳造にかかるトリベの可能性を考えておきたい。なお、包含層出土であるため、正確な時期の比定は困難だが、江戸時代以降の土器類とは素地が異なることから。

古墳時代から中世までの時間幅の中に収まるものとしておく。

31は瓦質土器の風炉。頭部片で、口縁部との境に突起があり、口縁部の連子状施文も一部確認できる。15世紀後半から16世紀前半頃のものと考えられる。

32・33は信楽産の陶器。32は甕の口縁部で、口縁端部は外側に折り返しが見られる。畠中英二氏による信楽焼編年<sup>④</sup>の2期新段階（古相）に相当し、16世紀後半頃のものと考えられる。33は壺の体部片で、3本の沈線が横方向に施されている。畠中編年の2期の範疇で把握できるであろう。

西調査区（テラス2）出土遺物（34～40） 34～37は土師器皿類。34・35は内面見込み外周に稜を有するもの。36は体部外面にやや強いオサエ調整を施している。37は底部である。34は石列S Z 2の前面にあつた溝から出土した。いずれも16世紀前半頃のものと考えられる。

38は小片だが、瓦質土器で鍋の口縁部と考えられる。口縁部がやや内巻する形態で、鍋というよりも熔炉とした方が適切かも知れない。

39は信楽産の陶器で擂鉢。内面には4本／1.5cmの擂目がある。擂目と擂目の間は広い。外面は粘土輪積痕の接合部を中心に、沈線状に仕上げた部分がいくつか見られる。編年上は畠中編年の2期中段階に相当するが、15世紀後半頃まで遡ると考えられる。

40は丸瓦。中央に三巴文、界隈は無く外区に珠点文を配する。丸瓦部分と瓦当面との角度が90°よりもかなり広いため、鳥食瓦と考えられる。瓦当面の形態から、江戸時代のものと考えられる。

東調査区出土遺物（41～43） 41・42は土師器小皿。底部から屈曲して直線的な口縁部となるもの。16世紀前半頃のものと考えられる。43はS X 3から出土した銭貨。北宋銭で皇宋通寶である。渡米銭のため時期比定は難しいが、16世紀以前に用いられたものと見て大過ないであろう。

テラス3出土遺物（44～53） 44～51は土師器小皿類。口縁部付近まで指オサエを行うもの（44・45）、口縁部外側に弱い面を形成するもの（46～50）、底部から屈曲して開く口縁部となるもの（51）に区分できるが、いずれもほぼ同時期で、後述の信楽産陶器・肥前座器と同様、18世紀中葉頃のものと考え

られる。

52は信楽産陶器で端反施。内面と外面上半には灰白色の釉が掛かる。外面下半は無釉でロクロケズリが見られる。焼中編年は4期古段階に相当し、18世紀中頃のものと考えられる。53は肥前産の磁器皿。内面には呉須筆描で2線格子目文が施される。内面見込みには釉掻き取りが見られる。焼継(補修)されている。堀内秀樹氏の編年によるVIa期<sup>a</sup>に相当し、18世紀中葉頃のものと考えられる。

(伊藤)

### 3 出土遺物の科学分析

トリベと想定されている30の付着物(第9図)について蛍光X線分析(SII 社製SEA1200VX、50keV、大気条件、測定範囲1mm)を行った結果、第1表、

第1表 屋敷の下遺跡出土トリベ状土製品蛍光X線分析結果

元素	w t %
Ti (チタン)	3.66
Fe (鉄)	15.07
Zn (亜鉛)	21.90
Cu (銅)	10.39
Pb (鉛)	48.98
	100.00

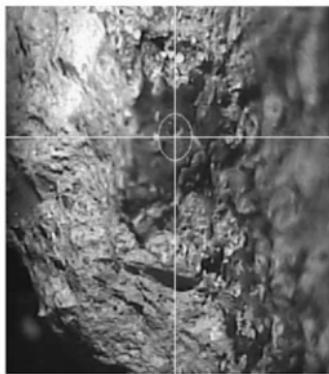


写真4 トリベ状土製品付着物

写真4の通りとなり、鉛、亜鉛、銅、鉄、チタンが検出された。

(問瀬)

#### 【註】

- (1) 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店、1980年)。
- (2) 古代の土器研究会編『古代の土器3・都城の土器集成』(1994年)。
- (3) 煙中英二『信楽焼の考古学的研究』(サンライズ出版、2003年)。
- (4) 堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年的事考」(『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』資料集、江戸陶磁土器研究グループ、1996年)。

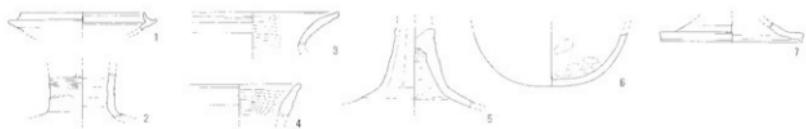
第2表 出土遺物観察表(1)

番号	実測 各分	様・質	部位等	地区	遺構・層名	法長(cm)	調査・技法/特徴	胎上	色調	残存度	特記事項	
1	6-7	須恵器	环身	西調査区	P1.8	(残高)10.2 (残高)1.5	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや 粗	7.5V6/1 灰	白目1/12		
2	6-6	須恵器	直	西調査区	P1.8	(残高)5.6 (残高)3.8	外:ハケメー波彫・ロクロナデ 内:ロクロナデ	滑	SA/ 灰	全体1/12		
3	6-3	土罐器	裏	西調査区	石組付近	(残高)2.8	外:ロクロナデ 内:ハケメー波彫	滑	7.5V6/6 橙	白目2/12		
4	6-2	土罐器	裏	西調査区	石組付近	(残高)2.4	外:ロクロナデ 内:ハケメー波彫	滑	30R5.6 明赤鈍	白目2/12		
5	7-3	土罐器	高环	西調査区	西	(残高)6.5	外:ハケメー(波彫り)→ナデ・ロコナデ 内:ヨコナデ→タヌリ	滑	7.5V6/1 黑鈍	脚1/12		
6	7-1	土罐器	裏	西調査区	西	暗赤褐色上 (灰褐色下)	(残高)4.5	外:ニビササエ→ナデ 内:ロクロナデ	滑	7.5V6/4 に凹 壤	近6/12	
7	6-1	須恵器	高环	アスコ 下	表上	(残高)11.6 (残高)1.6	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	滑	2.5V6/3 に凹 黄	底2/12		
8	10-2	須恵器	环身	東調査区	表上	(残高)11.2 (残高)5.1	外:ロクロナデ→ロクロケヅリ 内:ロクロナデ→ロクロケヅリ	滑	SA/ 灰	白目1/12		
9	10-3	須恵器	环身	東調査区	東壁2層	(残高)12.0 (残高)4.4	外:ロクロナデ→ロクロケヅリ 内:ロクロナデ・ナデ	滑	SA/ 灰	白目2/12		
10	7-2	土罐器	輪	東調査区	東壁2層	(残高)12.0 (残高)4.3	外:ナデ→ロコナデ 内:ロコナデ	滑	30R5.6 明赤鈍	白目1/12		
11	5-2	土罐器	直	東調査区	黄褐色上	(残高)3.0	外:ハケメーロコナデ 内:ロコナデ	滑	2.5V6/2 灰白	白目1/12		
12	6-4	須恵器	环蓋	東調査区	東壁右側	(残高)13.2	外:ロクロナデ→ロクロケヅリ 内:ロクロナデ	滑	SA/ 白色	天井3/12		
13	8-2	須恵器	环蓋	東調査区	灰色上	(残高)2.2	外:ロクロナデ→ロクロケヅリ 内:ロクロナデ	滑	SA/ 灰	天井2/12		
14	8-3	須恵器	环蓋	東調査区	灰色上	(残高)14.4 (残高)2.6	外:ロクロナデ→ロクロケヅリ 内:ロクロナデ	滑	SA/ 灰	天井7/12	天井部内面に同心円状当て 具痕あり。	
15	8-4	須恵器	环蓋	東調査区	灰色上	(残高)15.4 (残高)2.3	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	滑	SA/ 灰	白目2/12	14と同一個体の可能性あり。 接着不可。	

第3表 出土遺物觀察表（2）

番号	実物 通号	様・質	器種等	地区	遺構 等	縦横 等	法量(cm)	調査・収集の沿歴	出土	色調	残存度	特記事項
16	6-5	直角部	高脚	東調査区	灰色土	(残高)4.4	外:クロコナデ 内:クロコナデ	外:クロコナデ(口縁部)、ユビオサエ・ ナデ(口縁部) 内:ハケメーモコナデ(口縁部)、ナデ (体部)	青 青	2.50H/1. オリーブ風	全体1/12	
17	10-1	土師器	桶	東調査区	灰色土	(11)13.4 (残高)5.6	外:ヨコナデ(口縁部)、ユビオサエ・ ナデ(口縁部) 内:ハケメーモコナデ(口縁部)、ナデ (体部)	青 青	3106.6 横	口縁5/12		
18	8-1	土師器	桶	東調査区	灰色土	(底)3.6 (残高)2.3	外:ナデ 内:ユビオサエ・ナデ	青 青	10107.3 2.54H/3	底12/12		
19	11-2	土師器	桶	東調査区	灰色土	(底)6.4	外:ハケメーモオサエ・ナデ 内:工具ナデ	青 青	7.50H/4 2.54H/4	口縁2/12		
20	11-1	土師器	桶	東調査区	灰色土	(11)12.0	外:ハケメーモコナデ(口縁部)、ハケメ 内:ハケメーモコナデ(口縁部)、ナデ (工具使用)	青 青	3105.6 明赤褐	口縁4/12		
21	10-4	土師器	便	東調査区	灰色土	(11)11.2 (底)5.1	外:ヨコナデ(口縁部)、ユビオサエ・ ナデ(体部) 内:ハケメーモコナデ(口縁部)、ハケメ ナデ(体部)	青 青	3106.4 2.54H/4	口縁5/12 全体11/12	内部体部のナデは擦過痕あり。 工具使用か?	
22	9-1	土師器	便	東調査区	灰色土	(11)21.8 (残高)18.0	外:ハケメーモコナデ(口縁部)、ハケ メ(体部) 内:ハケメーモコナデ(口縁部)、ユビ オサエ・ハケメ(体部)	青 青	7.50H/4 2.54H/4	口縁3/12		
23	7-5	土師器	瓶	東調査区	灰色土	(11)23.4 (残高)6.2	外:ハケメーモコナデ(口縁部)、ナデ 内:ハケメーモコナデ(口縁部)、工具 使用のナデ	青 青	7.50H/4 2.54H/4	口縁1/12 以下		
24	7-4	土師器	瓶	東調査区	灰色土	(11)9.2 (残高)4.1	外:ハケメーモコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	青 青	7.50H/4 2.54H/4	底3/12		
25	3-8	土師器	坪	西調査区	F16.6	(11)13.6	外:ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	青 青	10108.3	口縁1/12		
26	4-6	質直器	耳身	西調査区	合包糊	(高台)8.1	外:回転ナード-貼付高台ナデ 内:回転ナード	青 青	3107.1 灰白	高台1/12		
27	4-3	質直器	耳身	西調査区	合包糊	(高台)9.8	外:回転ナード-高尾り-貼付高台ナデ 内:回転ナード	青 青	2.51H/2 灰黄	高台3/12		
28	4-4	質直器	耳身	西調査区	合包糊	(高台)10.9	外:回転ナード-貼付高台ナデ 内:ナデ・ヨコナデ	青 青	3107.1 灰白	高台3/12		
29	3-1	土師器	小瓶	西調査区	合包糊	(11)9.1 (高)1.5	外:ナデ・オサエ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	青 青	10107.4 2.54H/4	口縁2/12 口縁		
30	4-2	土師器	トロッカ	西調査区	合包糊	(11)5.8	外:オサエ-把手付手すり 内:オサエ・ナデ	青 青	2.51H/1 灰白	口縁3/12	把手(高)は1方向からも加れ ない、内部に金属成分付着。	
31	3-2	瓦質土器	風炉	西調査区	表土	(底)26.0	外:ミガニ・型押し施文(道子状) 内:ナデ・ヨコナデ	青 青	3105.1 灰	面1/12		
32	3-3	陶器	甕	西調査区	合包糊	(11)47.0	外:回転ナード 内:回転ナード	青 青	2.51H/6 明赤褐	口縁1/12	信楽	
33	4-1	陶器	瓶	西調査区	合包糊	(底)43.0	外:回転ナード-ハラ筋沈澱(3条) 内:回転ナード	青 青	10108.4 2.54H/4	体1/12	信楽	
34	3-7	土師器	小瓶	西調査区	S22前画面	(11)10.0 (高)1.1	外:ナデ・オサエ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	青 青	7.50H/4 2.54H/4	口縁2/12		
35	3-6	土師器	小瓶	西調査区	表土	(11)9.8 (高)1.5	外:ナデ・オサエ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	青 青	7.50H/6 横	口縁2/12		
36	3-5	土師器	小瓶	西調査区	S22付近	(11)12.0 (高)2.0	外:ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	青 青	7.50H/4 2.54H/4	口縁2/12		
37	3-4	土師器	小瓶	西調査区	合包糊	(底)6.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	青 青	2.51H/2 灰黄	底1/12		
38	4-5	瓦質土器	鍋	西調査区	合包糊	(11)40.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ・ケズリ(口縁端)	青 青	2.51H/2 2.54H/2	鍋底黄	口縁1/12	
39	5-1	陶器	楕円	西調査区	S22付近	(底)12.8	外:回転ナード・ナデ 内:回転ナード	青 青	7.50H/6 横	底3/12	信楽	
40	2-2	瓦	鳥糞瓦	西調査区	石垣下(東側)	(瓦当)14.5	外:工具ナード、瓦当型押レ 内:ナデ	青 青	2.51H/1 黄灰	瓦当面が瓦片部に対して直 接反らん。		
41	5-3	土師器	小瓶	東調査区	黄色土上	(11)9.0 (高)1.5	外:ナデ・オサエ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	青 青	7.50H/4 2.54H/4	口縁1/12		
42	5-4	土師器	小瓶	東調査区	SDA	(底)4.0	外:ナデ・オサエ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	青 青	10107.3 2.54H/4	底2/12		
43	5-5	瓦質	鉢	東調査区	SS3	(径)2.5	鉢形通路	-	-	完存	重さ1.9g	
44	1-2	土師器	小瓶	テラス3	表土	(11)6.4 (高)0.9	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	青 青	7.50H/4 2.54H/4	口縁部に擦過痕	口縁12/12	
45	1-8	土師器	小瓶	テラス3	表土	(11)6.6 (高)0.8	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	青 青	10107.4 2.54H/4	口縁部に擦過痕	口縁14/12	
46	1-7	土師器	小瓶	テラス3	表土	(11)7.5 (高)0.9	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	青 青	7.50H/4 2.54H/4	口縁部に擦過痕	口縁7/12	口縁部に擦過痕
47	1-4	土師器	小瓶	テラス3	表土	(11)7.4 (高)1.2	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	青 青	10106.6 2.54H/4	口縁部に擦過痕	口縁10/12	
48	1-3	土師器	小瓶	テラス3	表土	(11)7.8 (高)1.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	青 青	10106.6 2.54H/4	口縁部に擦過痕	口縁11/12	口縁部に擦過痕
49	1-1	土師器	小瓶	テラス3	表土	(11)7.8 (高)1.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	青 青	10106.6 2.54H/4	口縁部に擦過痕	口縁6/12	口縁部に擦過痕
50	1-5	土師器	小瓶	テラス3	表土	(11)7.6 (高)1.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	青 青	7.50H/3 2.54H/3	口縁部に擦過痕	口縁3/12	
51	1-6	土師器	小瓶	テラス3	表土	(11)8.6 (高)1.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	青 青	7.50H/4 2.54H/4	口縁部に擦過痕	口縁3/12	
52	1-9	陶器	小瓶	テラス3	表土	(11)9.0	外:クロコケブリ-施釉 内:施釉	青 青	2.51H/1 底白(素地) 2.51H/1 底白(素地)	口縁2/12	信楽 蘭反碗	
53	2-1	磁器	黒	テラス3	表土	(11)12.5 (高)1.1	外:クロコケブリ-施釉 内:施釉	青 青	88.0 黑(素地) 503.8 底白(素地)	口縁8/12	肥前窯 売き崩れ痕あり	

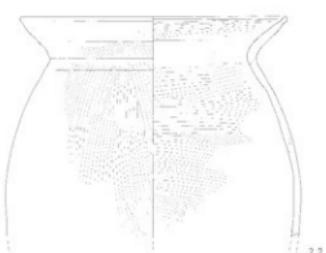
古墳・飛鳥：西調査区（1～6）



古墳：テラス3（7）



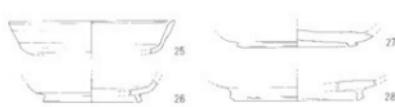
古墳：東調査区（8～24）



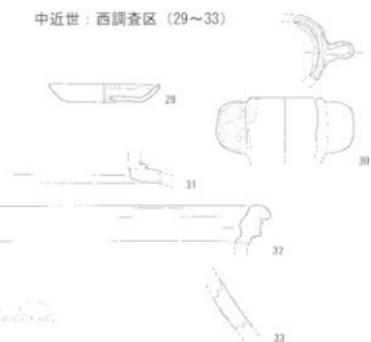
0 1 : 4 20 cm

第8図 出土遺物実測図（1） 古墳・飛鳥時代（1：4）

古代：西調査区（25~28）



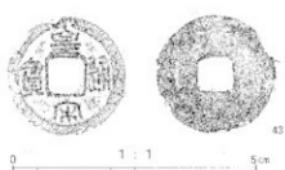
中近世：西調査区（29~33）



中近世：西調査区（34~40）

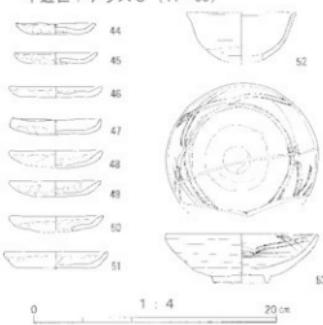


中近世：東調査区（41~43）



0 1 : 1 5cm

中近世：テラス3（44~53）



0 1 : 4 20cm

第9図 出土遺物実測図（2） 古代・中世・近世（43は1:1、他は1:4）

## V 調査のまとめと検討

今回の屋敷の下遺跡（西地区）第2次発掘調査は、地すべり対策事業（府中6期地区）に伴うものである。当遺跡の調査は、平成24年度に東条1号墳と一連で実施した調査を含め、2回目の調査にあたる。いずれも小規模なものであり、遺構・遺物に頗著なものがあるわけではない。

しかし、各時代の様々な遺跡群が展開する当地の特性を踏まえると、今回の調査成果からいくつかの興味深い情報を得ることができる。

ここでは、発掘調査で得た成果から、屋敷の下遺跡や府中北部地区的特性について見ていくたい。

### 1 古墳時代の遺構と遺物

#### a 遺構の状況

今回の発掘調査では、古墳時代の良好な遺構は確認できなかつたが、ピット群・焼土面・溝等を確認することができた。これらの遺構を素直に見れば、この地に古墳時代の集落遺跡が展開していることを示していると考えることができる。

しかし、調査地は丘陵の斜面部に相当する。ここに集落遺跡を想定することは、そのままでは難しい。ここで注目したいのが、当地の表層地質である。当地の地表は砂質シルトだが、地山は媒乱した花崗岩である。つまり、岩盤の上に自然堆積土が形成されているのである。

のことから、当地は純粹な丘陵斜面ではなく、最上位の河岸段丘に相当するのではないかと考えられる。つまり、古墳時代の集落遺跡は、丘陵沿いに残存した段丘面を利用していると考えられる。このように考えると、第1次調査（平成24年度）<sup>30</sup>で確認した分厚い堆積土も、段丘形成土と見なされよう。

古墳時代集落は、丘陵裾に残されたわずかな段丘面を中心に展開していたと考えられる。ただし、なぜこのような狭い地を選んで居住したのかは、今後の検討課題である。  
(伊藤)

#### b 遺物の状況

今回の調査では、古墳時代後期の土器類が一定量出土した。出土した須恵器は、一部飛鳥時代のもの

も含まれるが、おおよそ田辺昭三氏編年<sup>31</sup>のMT15型式に相当するものと考えられる。

これらの須恵器に共伴する土師器の特徴を見る。まず、甕は小型で、丸底・球胴のものと長胴のものがみられ、口縁部が外反して「く」の字状に屈曲する形態である。これらは、布留式の特徴を一部に残す古墳時代中期までの甕の口縁部や胴部の形態とは異なる。

甕は、伊賀地域でMT15型式以降の須恵器と共に併例が多い蒸氣孔が1つのもの<sup>32</sup>で、屋敷の下遺跡から約3.5km東に位置する天道遺跡の堅穴住居からMT15型式併行とみられる須恵器と共に出土している<sup>33</sup>。屋敷の下遺跡から出土している椀の形状と器面調整も、天道遺跡出土のものと類似している。

以上のことから、今回出土した土師器は、古墳時代後期前半ごろのものとみて良いだろう。特に東調査区第6層（灰色土）出土の土師器は、包含層資料であるものの、布留式の特徴を有しない甕（丸底球胴と長胴）、甕、椀、壺類であり、高杯は伴わないが、後期前半の伊賀地域における土師器の基本的な器種構成<sup>34</sup>を反映した資料と言えよう。

これら土器類の出土は、屋敷の下遺跡とその周辺に古墳時代後期の集落の存在を伺わせる資料である。第1次調査（平成24年度）では、谷状落ち込みから田辺編年TK10型式～TK20型式併行の土器が出土している<sup>35</sup>。この資料を合わせて考えると、集落が存在した場合の存続期間は、おおよそ後期前半から後半にかけてであろう。

屋敷の下遺跡が立地する柘植川流域には、前述の天道遺跡をはじめ、古墳時代後期初頭前後の時期に出現する集落が複数分布する<sup>36</sup>。また、伊賀地域の古墳時代後期における集落の形成と解体は、後期初頭前後（TK47型式～MT15型式段階）に画期があるとされている<sup>37</sup>。今回の調査で出土した後期前半の土器類は、これら伊賀地域の集落動態とリンクする資料になると考えられる。

(渡辺)

## 2 古代の伊賀国府と屋敷の下遺跡

奈良・平安時代の遺構・遺物は非常に少ない。しかし、少ないながらも奈良時代の遺物が出土したこととは特筆できる。この時期の遺物は、西調査区のピットや包含層から出土している。

当遺跡第1次調査では、平安時代の土器埋納状遺構が確認されている。当遺跡の丘陵縁辺部にあった段丘面は、古墳時代以降も集落地として利用されていたと考えられる。

この時期を考える上で重要なのは、当遺跡の東方約500mに位置する伊賀国府跡の存在である。古代の伊賀国府は丘陵縁辺に残存した上位段丘面に国府（政府）を配置したもので、その規模は全国各地で確認されている国府と比較して格段に小さい<sup>10</sup>。

小さな国府となった要因のひとつとして、古代律令制下で下国と位置づけられていたことが考えられている。しかし、その理由のみではなく、国府城としての広大な敷地を確保することが難しかったといった物理的要因も考えるべきであろう。

それを踏まえ、改めて屋敷の下遺跡を見てみる。当章の冒頭で見たように、当遺跡は残存する小規模な段丘面を利用したものである。伊賀国府に近いとはいっても、約500mほど離れている。にもかかわらず、奈良時代の遺物が出土しており、平安時代の土器埋納状遺構もある。このことから、屋敷の下遺跡が広義の国府エリアの一角であった可能性は考えてよいであろう。

屋敷の下遺跡が狭隘な段丘であることは既述通りだが、広大な面積を確保できなかったため、これら小規模段丘に分散する形態で国府関係の諸施設（建造物）が分散していた可能性を考えておきたい。具体的には、国府には国司館（当然複数地点が想定される）や正倉などが存在していたはずであり、これらの主要施設が小規模段丘上に散在していた可能性が考えられる。

今回の屋敷の下遺跡の調査では、伊賀国府に直接結びつくデータは得られなかつた。しかし、今後の調査進展があれば、当遺跡から伊賀国府関連の資料が確認される可能性は高い。当遺跡は、伊賀国府城を考える上で極めて重要な位置を占めることは、お

そらく間違いないであろう。

## 3 中近世の遺構と遺物

今回の発掘調査地点は、調査前の地形観察でテラス1～5の削平段が確認できた。これらの削平段は、テラス2南面で確認した石垣SZ1、テラス2で確認した石列SZ2から、室町時代後期（15世紀後半）頃には形成されていたと考えられる。

削平段は、当遺跡第1次発掘調査区周辺にも複数箇所確認できた。つまり、屋敷の下遺跡を含む東条集落の北側丘陵部は、南斜面を中心に入為的な削平段が連続して形成されていることになる。これらは、今回の発掘調査結果から、新しく見積もっても中世後期には形成されていたと考えられる。先述の古代以前における小規模段丘の状況からは、これら削平段の一部は、中世よりもさらに古くなる可能性も考えられる。

削平段には、テラス4では中世墓があり、テラス2では石垣と石列があった。今回の調査では、中世段階のまとまった出土遺物は無い。調査区が限定されているためかも知れないが、それでも少ないとと思われる。

調査前に地元で聞き取りを行ったところ、今回の事業地付近にはかつて社（神社）があったことを知った。明治20年の「東条村全図」<sup>11</sup>に神社の記載は無く、江戸時代以前のものであると考えられる。これに関連すると考えられるのが、テラス3の表土から出土した土師器皿類である。これらは近世後期のもので、灯明皿として用いられたものが含まれている。土師器皿類が出土した位置からは、テラス2か、あるいはテラス3の西部に神社建造物のあった可能性が考えられる。

第II章で見たように、当地周辺には「トノモト」「カマノシタ」「ミヤノシタ」といった地名があり、「セイコウ寺」という寺院があったという。また、東条4号墳の脇には「秋葉三尺坊」の石碑があるほか、丘陵標部には波多岐神社（合祀前の「蘿枕神社」）がある。東条集落と周辺に複数の宗教施設が存在していたことは確実で、屋敷の下遺跡で見られる削平段のいくつかが、これらに相当すると考えられる。

東条集落の西部には、山出氏館跡・屋敷ノ下跡・

倉田氏館跡などの小規模城館がある。今回の発掘調査によって、様々な施設の集合体として中世の東条集落を見ていく必要があることがよりはつきりしたといえよう。

#### 4 総括

以上、今回の発掘調査を基に、その成果と課題を見てきた。府中地区の北部丘陵は、古墳時代から古代・中世にかけての遺跡密集地帯である。旧伊賀国全体で見ても、とくに重要な地域と言ってよい。だが、丘陵据部の遺跡状況はそれほど明確にはなっていない。

今回報告した屋敷の下遺跡（西地区）第2次調査は、小規模な発掘調査であった。しかし、当地の歴史的意義を見ていくうえでは、重要な情報を提示できたと考えられる。調査資料の有効な活用を期待したい。

なお、今回の原因事業となった地すべり対策事業（府中6期地区）では、事業地内の地すべり状況を平面的に把握するために、伊賀農林事務所によって丘陵全体の地形図が作成されている。この地図は、災害を未然に防ぐために作成されたものであるが、精密な測量がなされたため、文化財の状況を知るためにも有益なものとなっている。第10・11図は、その一部を示したものである。

第10図は、伊賀市東条から同市土橋にかけての部分である。第II章で見たように、東条地区には屋敷の下館跡をはじめとした中世城館が点在しており、他にも西条地区的松本氏館跡・林氏館跡や、土橋地区の菅野氏館跡などが点在している<sup>60</sup>。これ以外にも、土橋から西条にかけて南方に派生する舌状尾根の先端部に人工的な削平段が複数箇所認められる。屋敷の下遺跡の調査成果から、これらのいくつかは中世まで遡る館跡・寺社跡ではないかと想定できる。詳細な踏査が必要であろう。

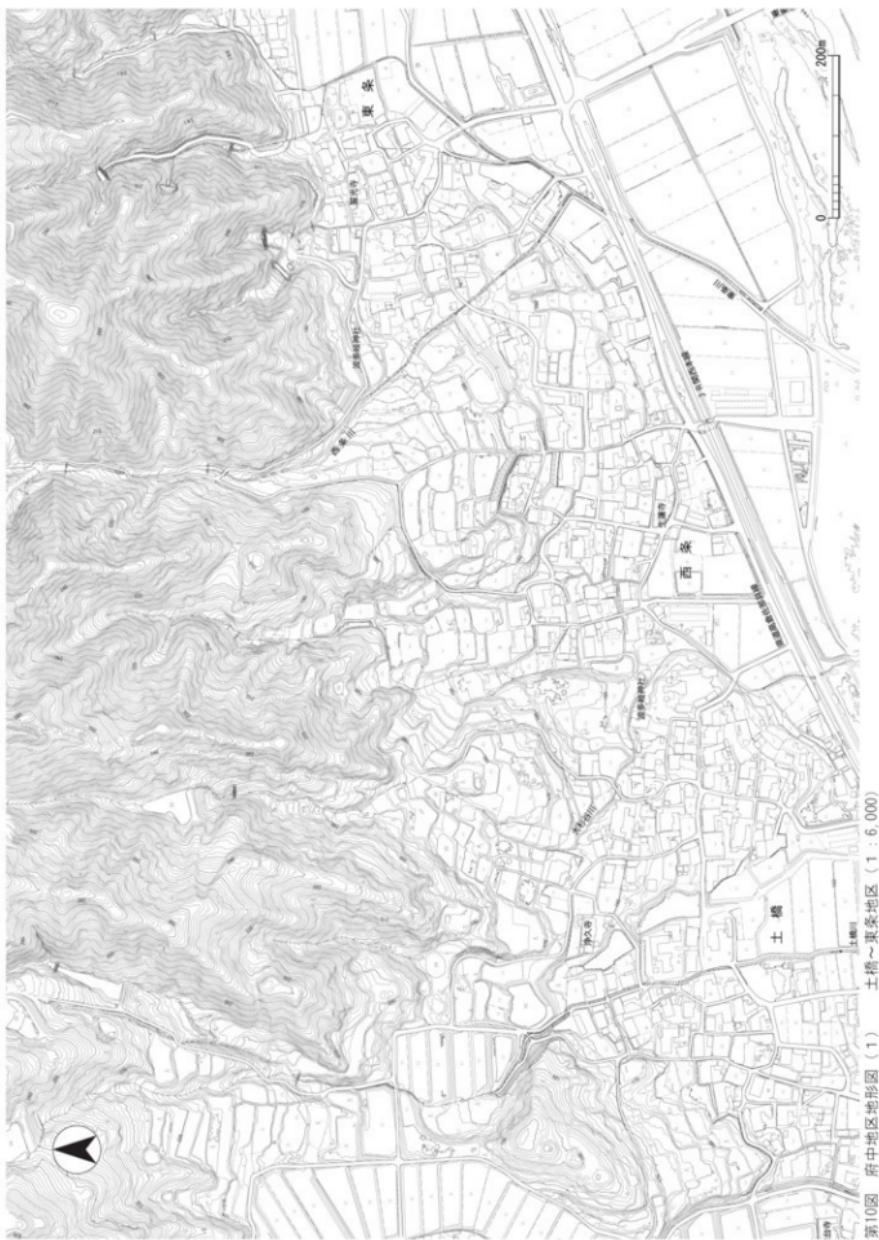
第11図は、伊賀市外山の丘陵部を示した。ここには、外山・鶯棚古墳群の地形と群構成が鮮明に現れている。当古墳群中の主要古墳測量図は、これまでにも公表されている<sup>61</sup>が、この図ではその周辺も測量されているため、群構成が明確に把握できる点でこの図の持つ意味は大きい。

また、第11図の南西角には、丘陵部にある国分寺とその背後に展開する楽音寺城跡が良好に表現されている。楽音寺城跡は網張り図が提示されている<sup>62</sup>が、この等高線図からは、網張り図の外側にも曲輪状のものが展開している状況を確認できる。

なお、第10・11図は伊賀農林事務所のご厚意によって掲載した。文化財保護には、こういった図面の活用も有効である。今後、部局を超えた情報共有を進めることが大切である。  
(伊藤)

#### 【注】

- (1) 三重県埋蔵文化財センター『東条1号墳・屋敷の下遺跡』(2015年)。
- (2) 田辺昭三『陶邑古墓址群』I (平安学園考古学クラブ、1966年)、同氏『須恵器大成』(角川書店、1981年)。
- (3) 伊賀地域では、古墳時代中期まで布留式の特徴を持つ甕が確認できるが、後期以降では今のところ明確な資料が見当たらない。渡辺和仁・小原雄也『伊賀地域における古墳時代中期の集落とその様相』(『集落から探る古墳時代中期の地域社会—被来文化の受容と手工業生産—』古代学研究会2012年度拡大例会シンポジウム資料集、古代学研究会、2012年)、渡辺和仁・小原雄也『伊賀地域』(『古代学研究』第201号、古代学研究会、2014年)。
- (4) 前掲註(3)文献。
- (5) 三重県埋蔵文化財センター『天道遺跡(第2次)発掘調査報告』(2010年)。
- (6) 前掲註(3)文献にある、伊賀地域における古墳時代中・後期土器群の二期(MT15型式以降)に該当し、これで示された器種構成や土器の特徴に対応すると考えられる。
- (7) 前掲註(1)文献。
- (8) 前掲註(4)文献。
- (9) 前掲註(5)文献。
- (10) 伊賀市編『伊賀市史』第1巻通史編古代中世(2011年)。
- (11) 三重県所蔵(県指定文化財)。閲覧にあたっては、県環境生活部文化振興課県史編さん班の協力を得た。
- (12) 伊賀中世城館調査会『伊賀の中世城館』(1997年)。
- (13) 伊賀市編『上野市史』考古編(2005年)
- (14) 前掲註(2)文献。



第10図 所中地区地形図（1） 土橋～東条地区 (1 : 6,000)



第11図 府中地区地形図（2） 楽音寺城跡、外山・鶴岡古墳群付近（1:6,000）

## 写 真 図 版



西調査区全景（北から）

写真図版 1



テラス2調査前状況（北から）左半が土壘状遺構



テラス2調査前状況（南から）右側が土壘状遺構

写真図版 2

遺構(1)

西調査区



調査後全景（北から）



調査後全景（南から）

遺構(2)

西調査区



石垣SZ1（南から）



石垣SZ1（西から）

写真図版 4

遺構  
(3)

西調査区



石列SZ2（西から）



石列SZ2（南西から）



石列SZ2（南から）

遺構(4)  
東調査区



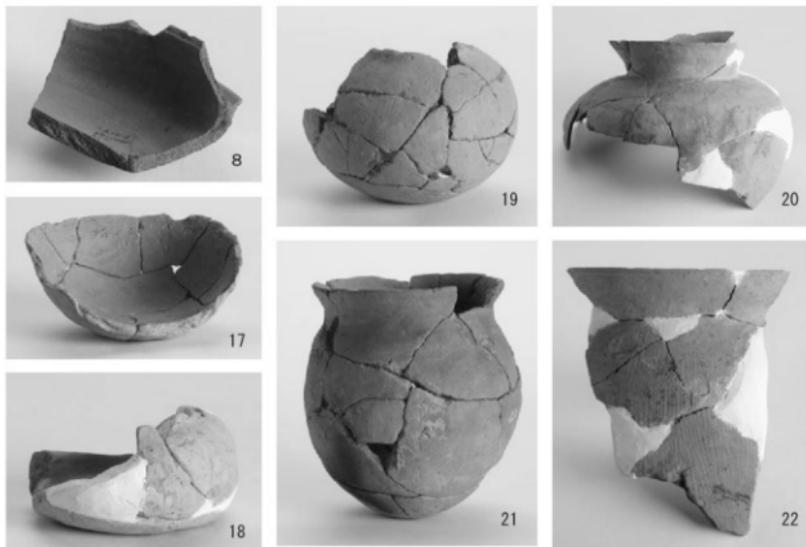
テラス4遺構検出状況（南から）



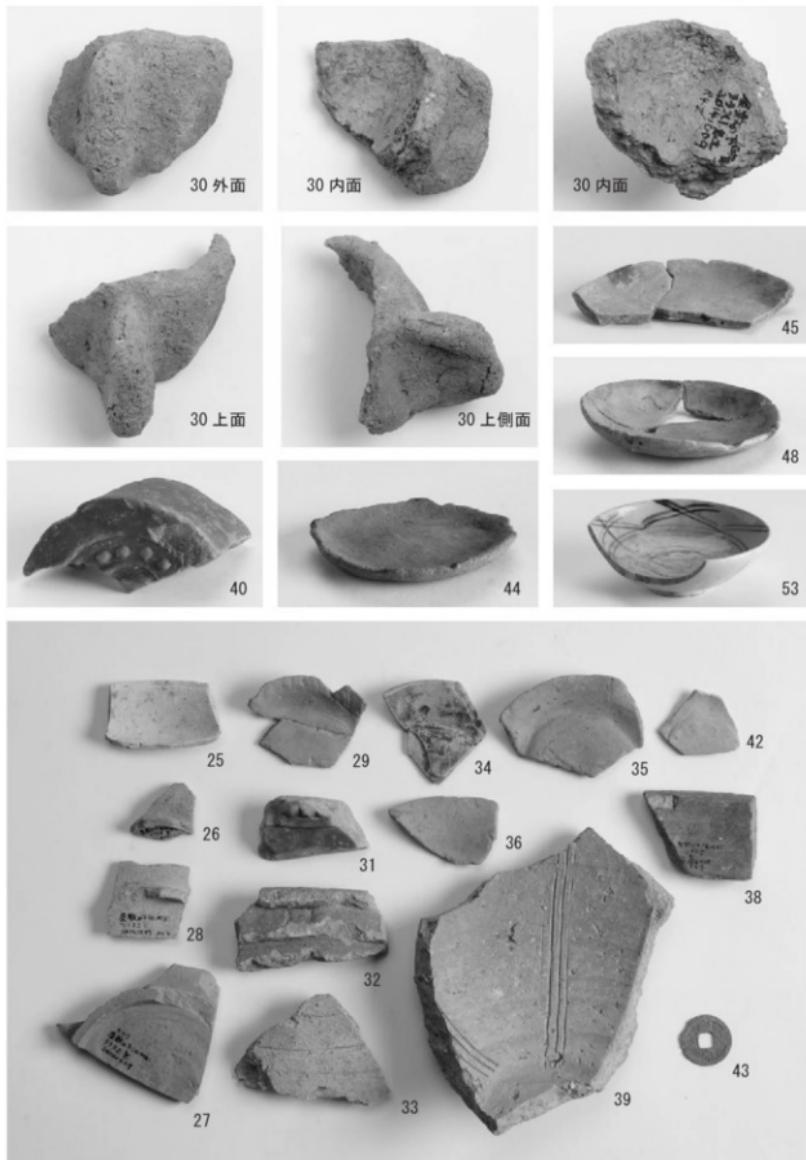
テラス4土層断面（北西から）

写真図版 6

遺物  
(1)



遺物  
(2)



# 報告書抄録

ふりがな	やしきのしたいせき (にしちく) だい2じはくつちょうさほうこく							
書名	屋敷の下遺跡（西地区）第2次発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	368							
編著者名	伊藤裕偉・渡辺和仁・間瀬創							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 Tel 0596(52)1732							
発行年月日	2016年3月14日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
屋敷の下 遺跡	伊賀市東条 字屋敷ノ下	24216	a939	34° 48' 07"	136° 9' 05"	2014/10/09 ~ 2014/10/23	68	平成26年度県営 地すべり対策事業 (府中6期地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
屋敷の下 遺跡	散布地	古墳 古代 中世	ピット・溝 中世墓	須恵器・土師器		中世以前のトリベ状土製品		
要約	<p>屋敷の下遺跡は、柘植川北岸の丘陵裾及び段丘上に位置する遺跡である。第2次調査は、工事用道路の造成に伴うものである。古墳時代後期、飛鳥時代、奈良時代、室町時代、江戸時代の遺構・遺物を確認した。古墳時代後期ではピットおよび溝があり、集落跡の一部と考えられる。奈良時代ではピットがあり、集落か、あるいは伊賀国府に関係した遺跡が広がっていた可能性がある。室町時代では石垣・石列や中世墓がある。江戸時代は、明確な遺構は無いが、幻明皿が多く出土した。</p> <p>注目できる遺物として、トリベ状土製品がある。縱方向の外耳を付加するもので、中世以前のものと考えられる。科学分析により、内面からは鉛・亜鉛の成分が多く検出された。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告 368

## 屋敷の下遺跡（西地区） 第2次発掘調査報告

2016（平成28）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印刷 共立印刷株式会社